

「クラウディウス帝の時に起こった」ユダヤを中心とする世界に起こった「飢饉」(11章28節)は、紀元46年の出来事である。そこで、アンティオキア教会がエルサレムの教会を援助するためにバルナバとサウロを遣わしたのは、46年か47年かの時点のことである。そうして12章の終わりの25節によると「**バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って**」来たのである。

この11章の終わりから12章の最後25節の間に挟まっている12章1節から24節の所は、「**ヘロデ王**」という王様の時代の話で、しかもこのヘロデ王は12章23節で「**息絶えた**」とある。彼が死んだのは紀元44年(ヨセフス『ユダヤ古代誌』19・351)。

つまり、今日から学ぶ12章1節から24節までの話は、少なくとも紀元44年よりも前の話である。バルナバとサウロがエルサレムに救援物資を持って行くよりも少なくとも2、3年前、そういう時点の話に戻っている。サウロとバルナバがエルサレムに来た時には、エルサレムはどんな状態になっていたのか、そのことを知らせるための振り返った記事である。

今日の1節から5節のところは、

1-2節、ヘロデ王がヤコブを剣で切り殺したという迫害。

3-5節前半、気をよくしたヘロデ王が更にペトロを投獄したという話。

5節後半、ペトロのために教会が熱心な祈りをささげていたという話。

1節

「そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし」

ここに出てくる「**ヘロデ王**」とは、ヘロデ・アグリッパ一世で、紀元41年から44年まで王として治めた人である。イエス様が誕生した時の「**ユダヤの王ヘロデ**」(ルカ1:5)と言われるのは、いわゆる「**ヘロデ大王**」と言われる「**ヘロデ**」であるが、その大王の孫に当たる。このヘロデ・アグリッパ一世の娘が使徒言行録24章24節に出てくる総督フェリクスの妻になっている「**ドルシラ**」、更に25章13節に「**アグリッパ王とベルニケ**」が総督フェストゥスの所に訪ねてくるが、この「**ベルニケ**」も娘である。そして、そこに出てくる「**アグリッパ王**」というのは、息子「**アグリッパ二世**」である。「**アグリッパ**」というのは、ローマ人の家名。

このヘロデ・アグリッパ一世は、第三代ローマ皇帝のガイウス・カリグラ(在位37-41)とその次の皇帝クラウディウスととても親しい中であつたため、これらの皇帝の引きがあつて、いつの間にかおじいさんのヘロデ大王の時代とほぼ同じ領域を全部領土としてもらい受け、また「**王**」という称号も与えられた、そういう幸運な人物である(ヨ

セフス『ユダヤ古代誌』18・237-239)。

この王が「**教会のある人々に迫害の手を伸ばし**」たのである。今までユダヤ最高法院サンヘドリンによる迫害とか、あるいは離散ユダヤ人のエルサレムにあるシナゴグがステファノを迫害するとか、こういう宗教上の迫害というのはあったが、今回初めて、国家権力による迫害が始まって来たのである。

ここでの「**教会**」とは、エルサレムの教会のこと。ステファノの時には、「**教会に対して大迫害**」が起こった(8:1)が、今日の所は教会に対してではなく「**教会のある人々**」に対してである。なぜか原因は何も分からないが、ヘロデ・アグリッパは迫害を始めた、という。

2 節

「ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」

「**ヨハネの兄弟ヤコブ**」とは、「**ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ**」、あるいは「**ポアネルゲス、すなわち『雷の子ら』と**」あだ名をつけられた兄弟(マルコ 3:17)の中のヤコブという人。このヤコブは、ペトロとヨハネと共にイエス様の三羽鳥の一人として、いろんな所で主イエスから特別に得らばれてお供をさせていただいた大事な弟子の一人である。

このゼベダイの子ヤコブとヨハネ兄弟については、マルコによる福音書10章39節で、十字架に架かる前の主イエスから「**このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか**」と聞かれて、「**できます**」というふうに返事をしたところ、「**確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる**」と言われていた人である。主イエスのこの言葉通り、ヤコブは殉教の「**杯を飲んだ**」のである。

3 節前半

「そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。」

このヘロデ・アグリッパ一世は、記録によると、殆どエルサレムで過ごし、先祖伝来の慣習を忠実に守って日ごとの清めの儀式といけにえを欠かす日はなかった、とされている(ヨセフス『ユダヤ古代誌』19・330-331)。

それほど、彼はユダヤ教に非常に熱心で、自分自身も忠実に律法を守って過ごした王だ、と言われている。だから「**ユダヤ人に喜ばれる**」ということ、彼は非常に高く評価したのであろう。それで「**ペトロを捕らえた**」。

3 節後半—4 節

「更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。」

「**四人一組の兵士四組**」が「**監視**」をするというのは、この後6節をみると、「ペト

口は二本の鎖につながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた」という場面が描写されているので、ここから考えると、おそらく「四人一組」とはいうものの、その内の二人がペトロの左右の腕に自らの体を縛りつけている、二人が牢屋の外で番をしている、こういう「四人一組」が一日四交代、6時間ずつ番をしていたのであろう。

「除酵祭の時期、……、過越祭」：本来「過越祭」というのは、二サンの月（太陽暦3月中旬から4月中旬頃）の14日の夜だけを表した祭である。それから1週間続くのが「除酵祭」という別の祭りであるが、この二つの別々のお祭りを一緒にして、二サンの月の14日から1週間を「過越」と呼んでみたり「除酵祭」と呼んでみたりと、どちらの名前で呼んでもいいと言うのが、当時のユダヤ人の習慣であった。

主イエスが捕えられる直前、ルカによる福音書22章1節で「さて、過越際と言われている除酵祭が近づいていた。祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである」と言われている。

マルコによる福音書の方では、14章1-2節で「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕えて殺そうと考えていた。彼らは、『民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう』と言っていた」と言われている。

つまり、時期が過越と除酵の祭りの間近であったという点で、今日のペトロ逮捕の物語は、主イエスの受難物語を思い出させるし、それから、「祭りの間はやめて」祭りの後にしようと考えていた点でも似ている。

ただし、その「祭りの間」は駄目だと考えた理由は正反対である。主イエスの場合は、抗議をする民衆の騒動が起こるといけないから後に回す、ヘロデの場合はむしろ祭りの後で全国からの巡礼者のいるうちにペトロを処刑することによって、民衆の人気を集めたいという動機であった。

5 節

「こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。」

「教会で、教会ではペトロのために熱心な祈りがささげられていた」という。ところが、この後、実際にペトロが奇跡的に救出された時、その時、マリアの家で信徒たちが集まって熱心に祈っていた。12節**「大勢の人が集まって祈っていた」**。にもかかわらず、そこに救われたペトロが行くと、皆は信じなかったのである。では、何を祈っていたのか。牢屋からのペトロの救出？

因みに、ここにも一つ、イエス様の受難物語を思い出させることが出てくる。それは**「熱心な祈りがささげられていた」**という点である。ルカによる福音書22章44節で、

ゲッセマネで主イエスが祈られた時、「**イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた**」という「切に」と訳されているのが「**熱心に**」と同じ言葉。「**切なる—熱心な祈り**」とは、自分の心を神の御心に添わせようとする格闘のこと。これを「**切なる祈り、熱心な祈り**」という。この「**祈り**」が、今日の箇所の場合「**彼のために**」、つまりペトロの「**ために**」「**ささげられていた**」と言われている。

さて、教会は何を祈っていたのか。ここは各自考えてみて欲しい。

もう一つ、次のことも合わせて考えてみて欲しい。「**教会**」のこのような「**熱心な祈り**」は、イエス様の三羽鳥の一人でヘロデ王に殺されてしまった「**ヤコブ**」のためにもささげられたのか、である。